

---

# aLia ~ 悪魔との契約者 ~

紅坂 怜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

a l i a ～悪魔との契約者～

### 【Nコード】

N 5 3 8 2 X

### 【作者名】

紅坂 怜

### 【あらすじ】

三百年もの間、グレイシアの民は悪魔との契約を続けてきた。故に彼らは人々から恐れられ、ときに迫害を受けたりもした。けれど、人々は知っている。彼らが何の為に悪魔と契約をするのか。知っているにもかかわらず、人々はまだ彼らの存在を疎み続けているのだ。そして、十年おきに行われる契約の儀式。冬華村の高等学校三学年首席の者は、自身の誕生日に悪魔と契約を交わす。

（11月20日に主人公とその友人の名前を変更しました。未修正がある場合は発見次第修正します）（12月5日にあらすじを編集

しました)

## e p 1 . 誕生日

いつもと同じチャイムの音が学校中に響き渡る。

「続きは次の授業で行います」

黒板の前にいる女教師は、教卓の上に置いてあったファイルを手に取ってから言った。

けれど、僕はもう二度とここで授業を受けることはない。それは言葉を発した当人である女教師も、教室にいる他の生徒たち全員も知っていること。

こうして、僕にとっての最後の授業が終わりを告げた。

「起立、礼」

日直の人の声を合図に生徒たちは椅子から立ち上がり、一斉に礼をする。女教師に向かって、僕はいつもより深くと頭を下げた。「ありがとうございました」という礼をしながらのあいさつも、いつもより心を込めたつもりだ。

真面目な顔のままの女教師は、窓際の席にいる僕を一瞥し、何も言わずに教室を去った。

僕たちの高校は各学年二クラス。にも関わらず、どのクラスも人数は少ない。一番多いクラスでも十二人で、一桁のところが多かった。ちなみに僕のいるクラスは十人。多い方ではあった。

人数が少ない理由は簡単。この学校の生徒や教師たち全員が？グレティアの民？だからだ。この村で暮らす人間は皆グレティアの民だが、グレティアの民全体の人数はさほど多くはなく、村自体も小さい。子供の数が少ないのも当然のこと。しょうがない、ということ

ころだろう。そんなことを今更考えながら、再び椅子に座る。

「龍希<sup>りゅうき</sup>」

背後から名前を呼ばれた僕は振り向く。

そこにいたのは、クラスメイトの一条海斗<sup>いちじょうかいと</sup>。僕の後ろが海斗の席

で、彼は自身の机に腰を下ろしていた。

「言っの遅れたけど、誕生日おめでとっ」

座っている僕を見下ろしながらそう言った彼は苦笑する。

海斗は僕より背が低い。というか、クラスの男子の中で一番低い。童顔だし、下級生だと言われても簡単に信じてしまっだろう。茶色っぽい黒髪 of 僕とは違い、彼の髪は真っ黒。まあどこにでもいっような学生だが、海斗は僕にとって一番仲のいい友達なのだ。

「ありがと。悪いな、先に卒業しちまって」

冗談っぽく言ったつもりだったのに、海斗は顔を曇らせてうつむいてしまった。

僕は呆れてため息をつく。そして海斗の左頬を抓った。もちろん、手加減をして。

「ふあっ!?!」

そんな間抜けな声を出しながらも、海斗はやっとな顔を上げる。

「大丈夫だよ。あんな儀式、すぐに終わるだろ」

「だけど……」

「心配すんなって。お前は僕を信じて待ってればいいんだよ」

抓られた頬を両手で押さえる海斗はまだ何か言いたそうだったが、僕は早口でそう言って自分の椅子に掛けてあっただ制服のブレザーを掴んだ。

ちょうど、その時。

ガラガラと大きな音を立てて教室のスライド式の扉が開いた。僕や海斗も含め、教室の中にいた生徒たち全員がそちらへと顔を向ける。

そこに立っっていたのは、スーツを着た三十代前半くらいの男性。整髪料で髪は整えられていて、おまけに眼鏡までしているものだけ

ら、すごくしつかりした人に見える。

「御神龍<sup>みかみ</sup>希くん」

はつきりと男性は言った。僕の方を見て。

「はい」

僕は椅子から立ち上がり、男性のもとへ向かう。

「気を付けるよ、龍希」

「わかってるって」

ブレザーの袖に腕を通しながら、立ち止まらず、振り返らずに僕は返事をする。「頑張り」ではなく、「気を付ける」と言うあたりが海斗らしかった。本気で心配してくれているのが伝わってきて、なんだかこつちまで緊張してしまう。

「行きましょう」

男性にそう促され、僕は歩き出した彼の後を追うように廊下を進んだ。

海斗の言った通り、今日は僕の誕生日だ。十八歳になったけど、あまり嬉しくはなかった。

それはこれから行われる儀式のせい。何をするのかは知っている。嫌な天気ですね」

前を向いたままの男性が話しかけてきた。僕は廊下を歩きながら、窓の外に視線を移す。なるほど、確かに嫌な天気だ。空は厚い雲に覆われていて、まだ夕方なのに暗い。僕は前を歩く男性の背中に、「そうですね」と短く答えておいた。

僕たちの教室は一階にあるため、玄関にはすぐに着いた。靴は履きかえる必要がないため、そのまま外に出る。秋とは思えないほど外は肌寒く、ブレザーを着ておいてよかったなとしみじみ思った。森がすぐ近くにある土が剥き出しになった殺風景な土地を少し歩くと、一つの古びた建物が目に入る。旧校舎。卒業式の会場だ。

僕たちは黙って旧校舎へと足を踏み入れ、歩きたびにギシギシと音を立てる廊下を歩く。天井には蜘蛛の巣、廊下には埃と、掃除が行き届いていないのが丸わかりだ。薄暗いせいもあって、不気味に思える。『とある儀式』を行う以外この旧校舎はまったく使われていないから、当然と言えば当然なのだが。

そして僕はこれから、その『とある儀式』を行う。グレイアの民、それもごく一部の者しか行うことができないとされているその儀式は、僕にとって卒業式のようなものだ。儀式に成功すれば卒業失敗すればどうなるのかは数日前に村長から教えてもらってある。

死、と村長は言った。その時の彼の顔と声を思い出すと、急に緊張感が増してくる。ああ、さっきまではあんなに軽い気分だったのにな。

そんなことを思っていると、男性が急に立ち止まった。

「こちらが会場になります」

男性が指したのは、廊下の左手にある両開きの大きな扉。何故か西洋風になっているその扉の隙間からは微かに光が漏れている。

「私にはここで見張りをする役目がありますで、御神くんはどうぞ中へ」

扉のノブに手をかけようとする男性に対し、

「自分で開けます」

言って、僕はノブを掴んだ。

この扉の先にはどんな光景が広がっているのか、予想はつく。まだ少し怖いけど、逃げないって決めたんだ。

僕はゆっくりと扉を押し開ける。

成功させてやる。絶対に。

悪魔との契約を。

## e p 2 . 契約

僕たち グレティアの学生は、一般的な学生が学ぶことに加え、特殊な技術を習得しなければならない。

それは剣や弓、槍などを使う戦闘技術。？戦闘学？という。

この世界には魔獣が生息する地域がいくつかある。今からおおよそ三百年前に起きたとある事件のせいで魔界からやって来てしまっただけ以来、魔獣は人々に様々な悪影響を及ぼしているのだ。農作物などを食い荒らしたりする他、人間が襲われることも幾度かあった。命を落とした者も少なくはない。

そしてグレティアの民には、魔獣を退治するという重要な仕事があるのだ。魔獣討伐の際に必要なのが戦闘学で、武器を使って魔獣を殺すのが普通。魔界の住人は魔力があれば存在することが出来ず、絶命すると体内からすべての魔力が放出される。魔力が完全に無くなると、そこには何もなかったかのように魔獣たちの亡骸は消えてなくなるのだ。

一般的な学力を身に付ける？基礎学？と、戦闘技術を身に付ける？戦闘学？。高校三年生の中で、どちらも僕が一番優秀だった。つまり、首席ということ。

悪魔との契約は十年おきに行う決まりになっていて、その年の高校三年生首席の人間が自身の誕生日に契約者となる。だから僕は今から、この旧校舎で契約の儀式を行うのだ。

首席であるという理由だけで契約者が決まる。悪魔と契約した人間は身体に微量の魔力を自然と纏い、その魔力は契約者の寿命を少しずつ縮めるのだが、僕は特別魔力に耐性があるわけでもない。魔力に耐性のある人間なんて聞いたことないけど、この世界のどこかには存在するのだろうか。

儀式に失敗すれば死に、成功しても寿命が縮む。大抵の生徒はそれを嫌がり、首席になろうとはしなかった。けれど、僕は別に構わ



ないと思った。死ぬことが怖くないと言ったら嘘になるけど、他のみんながやりたくないなら自分がやってあげてもいいかな、というような軽い気持ちだったのだ。もともと自分が生きている意味なんて分からなかったし、両親を幼い頃に亡くしたせいで家族もいなかった。自分が早死にしようが悲しむ人はいない。それはそれで楽なことだ。もしかしたら、海斗くらいは悲しんでくれるのかもしれないけど。

扉を開けた僕は室内を見渡す。まず目に入っただのは、無数の蠟燭。そして、床には大きく複雑な魔方陣が描かれていた。どちらも契約の儀式に欠かせないもので、魔方陣を囲むように蠟燭が並べられているというような状況だ。四方の壁際にはちらほらと人影が認識できた。

かなり広い空間のため、そこはかつて体育館だったのだと思う。生徒はもちろん一般村民の旧校舎への立ち入りは禁止されているが、契約の儀式を行う場合にのみ使用されているということは知っていた。道具さえ揃えば誰でも悪魔と契約できる、と図書館にあった本に記されていたのも覚えている。要するに、勝手に悪魔と契約を交わしてはならない、ということだ。

僕は魔方陣を見つめながら体育館の中へと数メートル歩く。すると、金属が擦れ合うような鈍い音と共に背後の扉が閉められた。カーテンも完全に閉められている暗い室内では、蠟燭の揺らめく炎だけが頼りとなる。その炎はどこか幻想的に見えた。

「御神くん」

数日前にも聞いた声。呼ばれた僕は、声のした方向である右斜め後ろへと体を向ける。

「心の準備は？」

村長は真剣な表情で問うた。僕はなんとなく笑顔を作り、

「できてますよ」

そう言葉を返す。僕の返答に村長は少し表情を和らげると、「これを」と言ってからある物を差し出してきた。

それはガラスでできた手のひらサイズの小さな瓶。中には赤黒い液体。僕の血液がたつぷりと入っている。儀式に必要なため、事前に採血しておいたのだ。本番で指などを切って血を出してもいいと言われたが、そっちの方が痛そうだったのでやめた。

僕は頷いて瓶を受け取り、振り向いて魔方阵へと歩を進める。歩きながら小瓶の蓋を開け、魔方阵の中央で立ち止まった。瓶を少しずつ傾け、中に入っていた血を魔方阵の真ん中にすべて零す。高い位置から零したため、辺りに血が飛び散った。僕は気にせず瓶に蓋をしてズボンのポケットへと入れ、魔方阵の端へと後ずさる。

靴の先が魔方阵に触れないようにしながらも、できるだけ魔方阵の近くへ。そんな位置で僕は後退をやめる。

「始めます」

一応報告してから、僕は右手を前に突き出す。魔方阵の中央へと手のひらを向けて。

大きめの深呼吸をした後にもう一度息を吸い、口を開く。

「金色に輝く月、灰色の雲に覆われて」

儀式を行う日の天気によってこの部分は変わってくる。今日は曇りだからこの言葉だ。

僕が第一詠唱を終えると、魔方阵の周囲に風が吹き始めた。風は徐々に強くなり、僕の髪やブレザーの裾を揺らす。

ここで怯んだら終わり。自分にそう言い聞かせながら、僕は第二詠唱へと移る。

「魔の力を持つ異界の者よ、紅き雫と炎のもとに。グレイティアの民、御神龍希の名において命ずる」

その言葉を合図に、風が飛躍的に強さを増す。魔方阵は風の壁に包まれて中が見えない状態だ。目を開けているのも辛いほどの強風に耐えきれなくなった僕は両腕で顔を覆う。

第二詠唱終了から数秒後、風の壁越しに魔方阵から青白い光が差した。魔方阵を通して魔界と繋がった証拠だ。すぐに眩しいくらい強い光になったかと思うと、その光は一瞬にして姿を消した。

とりあえず儀式は成功したようだ。次に重要なのは、どんな悪魔が召喚されたか。自分と契約した悪魔だし、どんな奴なのか気になるのは当然だろう。

風はだんだんと弱まっていき、青白い光が消えてから五秒も経たないうちに完全に止んだ。室内は真っ暗。吹き荒れる風の影響で蝋燭の火はいつの間にか消えていた。

僕は目を凝らす。魔方阵の中央に何かいるのはわかるのだが、それがどんな姿をしているのかまでは暗くてよくわからない。歪な形をした黒い塊にしか見えないのだ。

意を決して、その塊に近づいてみる。一步、そしてもう一步、と。三歩目を踏み出した瞬間、僕は息をのんだ。黒い塊を見て いや、その塊の一部を見て。

暗闇の中、二つの赤い目がこちらを見つめていた。

### e p 3 ・ 悪魔

「明かりをつけろ！」

体育館の中にいた誰かが叫んだ。

その声が響いてから数秒後、明るい蛍光灯の光が体育館を照らした。徐々に明るくなるのかと思っていたので、突然訪れた眩しさに僕は右腕で両目を覆う。

ゆっくりと目を開いて、魔方阵の中央へと焦点を合わせる。

「……え」

自然と口からそんな声が洩れた。

時間が止まったかのような感覚に襲われる。思考がうまく働かない。状況が理解できない。

儀式は失敗したのか、とまで思ってしまった。それほど眼前の光景が信じられなかったのだ。

確かに、魔方阵の中央には召喚されたのであろう座り込む一つの姿があった。それが本当に悪魔なのかどうかは別として。

暗闇の中でも光って見えた、赤い瞳。そこまではいいさ。悪魔らしいと思う。

だけど、蛍光灯の光を浴びて輝く金色のさらさらの髪は？ 座り込んでいるせいで地面についてしまっている長く綺麗な髪は、はたして悪魔らしいと言えるのか？

そう、それはどう見ても。

「人間……？」

呟くと、？彼女？はこちらを見上げながら無表情で言う。

「悪魔だよ、私」

それはそうだ、と心の中で思った。ただ信じられなかっただけで、この少女が悪魔だということぐらいわかっている。もちろん。あの

詠唱で悪魔以外が召喚されるはずがないのだから。

「えっと、その……は、はじめまして」

自然とそんなぎこちない挨拶になってしまう。

すると彼女はにっこりと笑い、

「はじめまして、御神龍希くん」

そう言った。

無表情なときは綺麗な子という感じだったが、笑うと可愛い子というような印象を受ける。とてもじゃないけど悪魔には見えない。悪魔の翼も角も尾もないし、まあ黒いワンピースを身に付けているところは悪魔らしいといえば悪魔らしいけど。

とりあえず何か言おうと僕が口を開いた瞬間、「成功したようだな」という村長の声が聞こえた。僕は口を閉じて村長のいるほうへと顔を向ける。

「まだ子供の悪魔か……」

立ち上がった悪魔の少女を見て、こちらへ歩み寄りながら村長はそう言う。

村長の言葉に少女は少しムツとしたらしく、唇を尖らせた。

「若いだけで子供じゃないもん」

言っと、彼女の右手の周囲に大量の黒い粒子が舞い始める。粒子は徐々に全長二メートルほどの細いフォークのような形を成して彼女の手のひらに収まった。それはよく漫画などの中で悪魔が持っているものにそっくりだ。

少女はそのフォーク状のものを、勢いよく床に突き立てた。ガンツという音が体育館内に響く。

得意げな少女の顔に、彼女はやっぱり悪魔なんだな、と僕は少々ビビりながら思った。

注意事項を含む短い話を村長から聞き、僕と少女は旧校舎から出

る。学校にまだ僕の荷物があるため、さっき来た道をまた戻らなければならぬ。ちなみに村長たちはまだ旧校舎体育館の中だ。

「明日の出発時のことですが、村長は多忙のため見送りに行くことはできないそうです。私だけでも伺いましょうか？」

儀式の会場に案内してくれた男性が体育館の扉の横でそう尋ねてきたが、僕は首を軽く横に振った。

「ありがとうございます。でも、見送りは遠慮させてください。好きな時間に出発したいので……」

「わかりました。それでは、お気を付けて」

お辞儀をしてきた男性に向かって僕は慌てて頭を下げ、少女と二人でその場を後にした。

儀式の前に校舎の廊下から見たときよりも空は少しだけ暗くなっていた。この調子だと、あと一時間もしないうちに雨が降ってくるだろう。

「あ、そういえば」

僕は隣に立つ悪魔の少女に目をやり、口を開く。

「名前、聞いてなかったよな？」

見た目からして同い年くらいのようなので、なんとなく敬語を使わずに話す。まあ、悪魔だから全然違う歳なのかもしれないけど。もしかしたら、何百歳も彼女の方が年上だったりして。基礎学の中でたまに悪魔や魔界のことを習ったりしたけど、そこまで細かいことは教えてもらってはいない。

「私の名前？」

「うん」

「んー……エリイ、でいいや。本当はもっと長い名前だけど、面倒だからエリイって呼んで。私の友達とかもそう呼んでるし。私も君のこと龍希って呼ばせてもらうね」

「わかった。じゃあ、これからよろしくな、エリイ」

差し出した右手を、エリイは無邪気に笑んで握ってくれた。

校舎に着くまでの間、僕たち二人に会話はほとんどなかった。エリイはずっと辺りをきょろきょろと見回していたし、僕は僕でこれから先のことを考えていたのだ。歩き始めて三分ほど経ってからエリイが寒そうに腕をさすっているのを見た僕が彼女にブレザーを脱いで貸し、「風邪ひくからこれ着ろよ」「ん、ありがと」などと軽く言葉を交わしたのが最後。それからただ沈黙が続いている。

隣を歩くエリイの方を見やると、腰のあたりまである長い金髪と黒いワンピースの裾が、僅かに吹く風の中で静かに揺れていた。その時に気付いたことだが、彼女は意外と背が高い。百七十センチメートル以上ある僕に比べれば低いけど、海斗よりは確実に高いだろうな。

そんなこともついでに考えつつ歩いていると、前方に校舎が見えてきた。

「……ん？」

校舎のある部分を見て僕は呟く。見慣れた人物にそっくりな姿が昇降口のガラス戸の前にあったからだ。

もしかして、と思いながら近づくと、やはりそれは思った通りで。

「海斗？」

彼はガラス戸に背を預けてタイルの上に体育座りのような状態で腰を下ろし　すやすやと眠っていた。

「おい海斗、なんでこんなところで寝てんだよ。起きろって」

「うーん……」

しゃがみ込んで肩を揺らしてやると、海斗はそう唸ってからゆっくりと目を開けた。僕の姿を認識したその眠そうな目は一瞬にして見開かれる。

「うわっ、龍希！？　いつからここに……って、儀式は？　身体は  
大丈夫なのか！？」

「質問が多いな……。　今来たとこだよ。儀式は成功、この通りピン  
ピンしてる」

「そっか……」

海斗はわかりやすく安堵の表情を浮かべた。

「お前こそ、いつからここに？　……もしかして、学校が終わって  
からずっと待っていてくれたとか？」

問うてはみたものの、

「いや、無事でよかったよ、本当……うん、マジで……」

なぜか海斗は顔を膝に埋めてしまった。肩が震えているため泣い  
てるのかもしれない。

「よかった……生きててくれて……うっっ……」

「……ったく、さっきまで気持ちよさそうに眠ってたじゃねえかよ。  
ほら、顔上げろって」

海斗の頭の上に手を置いて声をかけるが、顔を上げた彼は予想以  
上に本気で泣いていた。

「おい待て、そんなことで本気で泣くな！　高校生男子だろ！！」

「で、でも！　俺、本当に心配で……！」

ワイシャツの上に着ている灰色のカーディガンの袖で流れる涙を  
拭う姿はやっぱり子供っぽくて。けど、そんな海斗を見てても恥ず  
かしい奴だなどとは思わなくて。

不思議な奴なんだ、海斗は。昔からそうだった。小学校一年生の  
ときからずっと同じクラスで、一緒にいるのが当たり前みたいな存  
在で。喧嘩をしたことも何回あったけど、次の日にはちゃんと仲  
直りできてて。

昔のことを思い出しながら、苦笑してため息をつく。

「わかったから、もう泣くな。僕は元気だから、な？」

「……うん」

頷いて、海斗はもう一度カーディガンの袖で涙を拭った。



「龍希の友達？」

突然そう声を上げたのは、屈みながら僕と海斗を見下ろすエリイ。海斗は彼女の存在に気付いていなかったらしく、「え？」と少し驚いたように泣いた後の赤い目でエリイを見上げる。

「ああ、えっと……こいつは一条海斗。エリイの言った通り、僕の友達だよ」

「ふーん……」

立ち上がりながら言葉を返すと、エリイは小さく呟いてから祐希に向かって手を差し伸べた。

「はじめまして、海斗くん。ほら、君も立ちなよ」

「あ、うん、ありがとう……」

海斗はエリイの手を掴んで立ち上がる。顔を見る限り、彼はかなり動揺していた。見知らぬ人間が相手なんだから当然だろう。そして、立ち上がった海斗はやっぱりエリイより背が低かった。そのことに関しては、誰も何も言わなかったけど。

「私はエリイ。よろしくね」

「よ、よろしく……」

につこりと笑ってくる彼女に、海斗は僅かに顔を赤くする。その顔のまま、今度は僕に顔を向けた。

「二人ともどういう関係？　もしかして付き合ってるのか？」

「彼氏彼女の関係じゃねえよ。僕はエリイの契約者だ」

「契約？　何の？」

僕は頭を掻く。まあ、やっぱりそうだな。こんなに人間みたいな外見の女の子を悪魔だなんて思わないよな、普通。

少し遠まわしに言ってみる。

「僕はさっきまで何してた？」

「何ってそりゃあ、儀式で悪魔との契約を……」

そこまで口に出してやっと気付いたらしい。

「え、マジ？　嘘だろ？」

「本当」

意地悪く笑って言うと、海斗は心底驚いたという顔をした。当然の反応だ。

ほんの一瞬だけ、あることが脳裏に浮かぶ。それは海斗が、悪魔であるリリイを拒絶してしまうのではないかということ。悪魔に触れても体に害はないということは学校で軽く習ったが、それでも嫌だという人は大勢いる。なぜなら、悪魔は魔力を持っているから。普段は魔力を出していないけど、その気になれば悪魔はいつでも魔力を放出したりできるということも習った。近くにあるものはもちろん、魔力があれば少し遠くにあるものでも破壊したりできる。魔法みたいな力なんだ、魔力は。そして、その破壊できる？もの？の中には人間も含まれているから。

けれど、僕のそんな心配は杞憂に終わった。

「よかったな、龍希！　こんな可愛い悪魔と契約できて！」

そう言っただけでバンバン背中を叩いてくる海斗には少し呆れたけど。

可愛いと言われた張本人のリリイは特に照れるわけでもなく、可愛らしいきよんとした顔で何も言わずに首を傾げていた。

「あ、そうだ」

背中を叩いた仕返しにそろそろ足首でも蹴ってやろうかと思っていると、海斗はふと思いついたように足元のスクールバッグを掴んだ。その紺色のものが誰の私物なのかなどすぐに分かる。

「ほら、これ。また教室まで戻るの面倒だろうと思ってさ、持ってきておいたぜ。荷物、これだけだろ？」

掴んだバッグを差し出しながら海斗が問う。僕は頷いてから礼を言い、それを受け取った。

「出発……明日なんだろ？」

「ああ、緊急事態でも起きない限りはな。時間はまだ正確には決めてないけど、午前中には出ようと思う」

そこで海斗が何か言おうと口を開いたのを僕は見逃さなかった。すかさず、

「見送りには来なくていいからな」

早口で言う。

「え、何で!? まさか、俺のこと嫌いとか……?」

「違う違う。明日、平日だろ? お前はちゃんと学校に行けってこと」

別に一日くらい遅刻しても平気だつて、と抗議する海斗に僕は首を横に振る。

「やっぱり俺のこと嫌いなんじゃない……」

まだそう言い続ける海斗に呆れた僕は大きなため息をつき、彼の右頬を抓った。今度は、少し強めに。

「痛い痛い痛い!!」

叫ぶ海斗を五秒程度見てから手を離す。

「あれだけ長い間一緒にいたんだ。それなのに嫌いだなんておかしいだろ。……もうお前に迷惑かけたくないんだよ」

「迷惑なんかじゃない! 俺はただ自分の意思に従ってるだけで」

「それでもダメなものはダメだ。海斗、お前は明日も遅刻しないでちゃんと学校に行け。わかったか?」

だが、海斗は答えずに黙ってうつむいてしまう。

そんな沈黙が十秒ほど続いてから、海斗は小さく頷いた。それでも顔を上げようとしない彼を見て、僕は頭を掻く。

「……もう一生会えないってわけじゃないんだから」

なだめるように言うのと、「わかってる」という声が返ってきた。

「でも、次に会えるのはいつになるかわからないんだろ?」

「それは……そうだけど……」

確かにそうなのだ。明日からの旅は現世 僕らが今いるこの世界だ の将来に関わるような重要な任務を成し遂げるためのものなのだが、村人たちはその任務を成し遂げることが簡単なことではないと知っている。だから村人たちは、契約者が任務を遂行できなくても酷く責めたりとかはしない。任務が遂行できずに帰ってきてても、別に構わないのだ。さすがに一カ月未満とかで帰ってきたら皆

から冷ややかな目で見られるだろうけど。過去に途中で帰ってきた契約者は何人もいたが、最低でも三カ月は旅に出ていた。

「何の情報も得られないまま数カ月でのこのこ帰ってくるか、任務遂行して英雄になって帰ってくるかだな」

わざと明るく笑った。そこで海斗はやつと顔を上げる。

泣いてなんかない。彼は真剣に僕の目を見てきた。

「お前がどんなに情けなく帰ってきてても、俺はお前を軽蔑したりなんかしない。ちゃんと迎えてやる。……無事でいてくれればそれでいいんだ」

ただ、と続ける。

「……どんな結果でも受け止める、っていう自信はないけど」

それがどういう意味なのかはなんとなくわかる。

任務が遂行できずに帰ってきた数人の契約者。それ以外の契約者は皆、帰ってこなかったということ。その理由のほとんどが？行方不明になった？というものだ。失踪した契約者たちが今どこで何をしているのかは知る由もないが、恐らくは死んだのだと思う。なぜそうなったのかもわからない。問いかける相手がいないのだから。

十年前、僕のように悪魔と契約を交わした人は帰ってこなかった。二十年前の契約者も同じ。三十年前の契約者は帰ってきたけど、完全な任務遂行はできなかった。

海斗はきつと、僕が十年前や二十年前の契約者たちのようにになった時のことを言ってるんだろう。だから、僕は言葉を選びながら口を開く。

「大丈夫だよ。だって」

だって、の続きは言おうか少し悩んだけど、言わないと説得力がない。言ってもあまり意味はないかもしれないけど、一応だ。

「僕は三十年前の契約者　　任務遂行できずに帰ってきた契約者の息子なんだから」

その言葉を聞いた海斗は気まずそうに目線を落とす。ああ、逆効果だったかな。やっぱり言わなければよかった。

僕の隣に立つエリイはというと、うつむいて目を見開いていた。

悪魔として少しは驚いたりするのかな、くらいのことは思ったけど、ここまでの反応は予想外だ。動揺したように右手で口を覆っている。声をかけるべきか迷ったけど、やめておいた。何か訊いてはならないような気がしたのだ。

「と、とにかく、僕もきつと父さんみたいに何事もなく帰ってくるよ。僕だって命は惜しいから死なない程度に頑張る。生きて帰ってくるって約束するから。頼りないかもしれないけど、信じててくれよ」

うん、と海斗は力強く頷く。

「信じてる。龍希はちゃんと帰ってくるって、信じて待ってるよ。約束する」

右手を差し出してきた海斗は、「男同士だから指切りよりこっちの方がいいだろ」と歯を見せて子供っぽく笑う。僕はその手を取り、笑い返した。

それから数分ほど三人で話をしたが、その間に海斗がうつむいたり泣きそうになったりすることは無かった。本格的に雲が降雨直前のようになってきたので僕とエリイは海斗に別れを告げたが、彼は僕らの姿が見えなくなるまで笑顔で手を振ってくれていた。

家に着いてから三分後くらいに雨が降り出した。木造の家を叩く勢いの強いその雨は、どうしても不吉なことにように感じてしまう。

「明日までには晴れてくれればいいね」

そう言ったエリイは今、僕の部屋のベッドの上に座り込んで閉ざされた窓から空を見上げていた。

パンやスープ、サラダなどを夕飯として食べ終えた僕らは明日からのことについて話をする。

「ああ、本当にな。……それで、エリイは旅の目的についてどれく

らい知ってるんだ？」

問うと、彼女は窓から僕の方へと視線を移す。

「ほぼ全部、かな？ 三百年前に起きた？ 現世侵攻・虐殺事件？ に関すること……というか、？ アリアの石？ のことかは知ってる」

「……それじゃあ僕から説明することは何もなさそうだな」

エリイは僕が知っていることをすべて知っているらしい。説明する手間が省けたのでよかった。話すと長くなりそうだったし。

？ 現世侵攻・虐殺事件？ とは、レイアスⅡヴィールドという若い悪魔が起こした事件。彼は仲間の悪魔数人や魔獣と共に現世に侵攻し、その際に現世で暮らす大勢の人々が彼らに襲われて命を落とした。その殺し方がまた酷かったらしい。人の全身の肉を食い千切っていく魔獣に、赤子を守るように抱いて命乞いをする母親を赤子ごと刺し殺したりする悪魔。家や森に火を放ったりもしたそうだ。考えるだけで気分が悪くなる。

数週間ほど暴れると、レイアス達は魔界へと帰っていった。そのたった数週間で国民が全滅して滅んだ国もある。とても悲惨な事件だった、と幼い頃に親から教わった。

その事件が終わってすぐに問題となったのが、？ アリアの石？ という存在だ。

事件後、魔王から命を受けた一人の使者が魔界から現世にやってきて言った。

「我々はアリアの石というものを探しているのです」

その使者曰く、現世に侵攻してきたレイアス達悪魔はアリアの石というものを使って暴れていたらしい。

本来、悪魔は人間と契約をしなければ現世に長く留まっておくことはできない。最高でも一日くらいだ。しかも、現世と魔界を行き来するのは命懸けだということも彼らは知っていたはず。そんな危険を冒してまで現世に来ようと思ったのは、彼らがアリアの石を持

つていたから。というか、アリアの石があれば二つの世界を行き来することなんて容易いのだ。何も危険なことは無い。

アリアの石には不思議な力があり、簡単に言くと、「魔力を強化することが出来るもの」だという。その力のおかげでレイアス達は無契約のまま現世で暴れることができたのだ。

そして彼らが魔界に帰ったのは、アリアの石を失ったため。石の無い状態でもレイアス達はなんとか魔界に着いたそうだ。必死に辿り着いた魔界で、すぐに処刑となったが。

魔界の使者から直接話を聞いたこの国の当時の王は思った。「その石を返したら悪魔たちがまた現世に侵攻してくるのではないかと」。けれど使者は、「このような事件を二度と起こさないようにするために必要なものなのです」と続けた。アリアの石があれば、魔界と現世を完全に切り離すことができるのです。魔界に石を返すのが不本意なら現世側から切り離してくれても構いません。ですが、アリアの石の気配は悪魔にしかわかりませんし、アリアの石の力を使って二つの世界を切り離すのも悪魔にしかできません。なので、そちらで悪魔を召喚し、契約していただきたいのです。……それが始まりだった。

現世侵攻・虐殺事件が起きてから、今年でちょうど三百年目。事件以来、現世の人々は悪魔と契約を交わし続けている。とはいえ、契約しているのはごく一部の人間だけで、十年おきに一人契約というシステムだ。それを決めたのは国王で、僕らが住むこの村？ 冬華村？の村人をグレイアの民と名付け、村に一つしかない高校の三年生首席である者に悪魔と契約をするよう命じた。

冬華村を選んだ理由の一つ。それは、近くに他の村がなかったから。いくつかある孤立した村の中からランダムで選んだらしい。

悪魔と契約をするのだからそれなりに恐れられたり非難されたりするだろうから、そばに他の村があるとお互いに嫌な思いをするのではないかという配慮だったのだろう。ありがたいと言えばありがたいのかもしれない。

余談だが、グレティアとは魔界で昔使われていた言葉で？契約？を意味するのかなんとか。

こうして、今まで何の関わりも持っていなかった現世と魔界との新しい関係ができた。レイアス達の持っていたアリアの石は現世のどこかにあるらしいのだが、いくつかに分かれているため探すのは極めて困難。それでも三百年の間に石の欠片は何個か見つかったいて、あと半分ほどで完全な形になる。

けれど、ここで問題が起きた。それは？アリアの石の力が弱まってきたという事。石の力が消えれば二つの世界を切り離すことは不可能となり、さらには現世と魔界の境界線が消滅してしまう可能性があるというのだ。境界線が消滅すれば　つまり現世と魔界が繋がれば、互いの世界を自由に行き来できてしまうということ。そんなことになれば、現世に未来はないだろう。

アリアの石がいくつもあれば問題ないのだが、魔界に一つあるというか、あった　だけなのだ。魔界では一番の宝として厳重に保管してあったはずらしいのだが、意外とあっさりレイアス達に奪われてしまったらしい。

石の力が消えるギリギリまで欠片がすべて見つからなければ、きっと国王は大勢の人間に悪魔と契約をさせるはず。そうならないために、早く残りの欠片を見つけなければならぬのだ。

「明日から？零魔<sup>れいま</sup>の森？に向かって旅をしようと思うんだけど、いいか？」

零魔の森とは、今までに見つかったアリアの石の欠片がまとめて保管してある場所で、冬華村から北に二週間ほど歩いてやっと到着するという距離にある森だ。

「うん、いいと思う」

エリイはこくんとうなずく。それから彼女はベッドの上に寝転がり、布団を胸に抱いて顔を埋めた。だが、僅か数秒で顔を上げる。



「そういえば、龍希のご両親は今どこにいるの？」

当然の質問だった。

「挨拶しようと思ったんだけど……共働きで夜遅くに帰ってくる、とか？」

彼女の問いに僕は首を横に振る。

「いないんだ、二人とも。僕が十歳の頃に死んだから」

どうしてまた重い話になるんだろう。僕は別に気にしていないことなのに、皆はすごく心配してしまう。心配させたり迷惑をかけたりするのはできるだけ避けたいのに。

「そう、なんだ……」

案の定、エリイは顔を伏せた。本当のことは答えずに、適当に誤魔化しておけばよかったのかもしれない。僕は別の話題を探し、見つけた言葉を口にする。

「お前も風呂、入るだろ？」

しかし、意外なことに彼女は頷かなかった。

「あー、私はいいや。実は召喚される直前に向こうで入ったんだよね、お風呂。それにもう眠いし……」

言ってから小さく欠伸をした彼女を見て僕は苦笑する。まだ八時だというのに本当に眠そうだ。

「じゃあ僕だけ入ってくるよ。あと、寝てもいいけど風邪はひかないように」

「うん。いつてらしゃい」

エリイは眠そうな顔のまま微笑んで、ベッドの上からひらひらと手を振った。

僕が風呂から出て部屋に戻ってきた頃には、彼女はすでに眠っていた。

## ep1・旅立ち

強い雨が頭上から全身を叩く。寒い。手のひらが冷たい。

その日は僕の十歳の誕生日だった。

「龍希……」

僕の名前を呼ぶ、母親の擦れた声。

「早く……逃げ、て……」

それが母親の最後の言葉となった。

真っ赤な血の海に沈む母親の姿を見て僕は立ち尽くす。お母さん、お母さん、とただ繰り返す僕の声。その声に重なって聞こえたのが、聞き覚えのある誰かの声。そして、大剣を自身の腹に突き刺した父親の叫び声。

「……お父さん、お母さん」

絶命した両親の姿を前に、僕はその二つの単語しか口にする事ができなくて。

「ん……」

突然目が覚めた。

ベッドからメートルほど離れた位置でそれに平行に布団を敷いて寝ていた僕は、上体を起こしてベッドの上を見やる。こちらに背を向けている状態で横になっているため確認はないが、エリィはまだ眠っているようだ。

「またあの夢か……」

僕は自身の右手のひらに視線を移して呟く。

両親が死んだ日からたまに見るあの夢。ここ最近は見えていなかったから随分と久しぶりだった。

やっぱり、まだシヨックが消えてないんだと思う。あの時のこと

を思い出して泣いたりとかはしなくなっただけど、悲しくないわけじゃない。寂しくないわけでもない。

けれど年月は経って、僕も高校生になった。だから、きっとそういうものなんだろう。

初めはすごく悲しんだりしていても、いつの間にかその人がいないことは当然だと思うようになる。慣れる、ということなんだろう。か。まあ、僕が冷めた人間なだけなのかもしれないけど。

でも、それに慣れるということは悲しいことだと思った。

ふと窓の外を見ると、空はよく晴れていた。昨日とは違う、絶好の旅日和だ。

胸を撫で下ろすような気持ちのまま再び部屋の中へと顔を戻すと、

「……え」

ぐらり、と視界が揺れた。

何だ、これは。頭が痛い。体が重く、熱い。体の中で何かが疼いているように感じる。一番苦しかったのは呼吸がしづらいということとで、僕は胸を強く押さえる。

「う、あ……っ」

止まらない冷や汗に、朦朧とする意識。見つめた自分の左手のひらもばやける。

やばいな、これ。死ぬかもしれない。契約者が死んだらその悪魔の契約は破棄され、悪魔は魔界に帰るんだったよな。じゃあエリイは大丈夫か。よかった。そんなことが頭に浮かんた。

僕の名を呼ぶ声が聞こえる、直前に。

「龍希……」

それがエリイの声だということはずぐにわかった。

彼女の右手が僕の左肩を掴む。そのまま素早く布団の上に仰向けの状態で倒されると、僕の目に彼女の姿が映った。エリイは布団の横に右膝をつき、左足は僕の体の上を跨ぎ、僕を見下ろしている。

そして僕は気付いた。悪魔の羽と角がエリイに生えていることに。エリイ、と言おうとした瞬間、彼女の両手が僕の額にかざされた。僕はわけがわからないまま反射的に目を瞑る。

その状態でも、エリイが手をかざす僕の額が青白いような光を放っているのはわかった。

「間に合って……！」

エリイの声が聞こえる。焦るような彼女の声が。

苦しみが完全に無くなったのは、数秒後のことだった。

光が静かに消えて、エリイが僕の額から手を離して。それから僕は目を開ける。

「……エリイ」

僕は布団の上から彼女の顔を見上げる。いつの間にか羽と角は消えていて、初めて会った時と同じ姿に戻っていた。

その時、エリイの目は潤んでいたように見えた。なに、と彼女は泣きそうな声で言う。

「ありがとう。おかげで助かった」

僕は言いながら体を起こす。まだ息が荒かったりしたけど、仰向けの状態を上から見られるのは少し恥ずかしかったのだ。

やがて彼女は、ううん、と首を横に振る。

「私のせいなの。龍希の今の発作、私が原因なの」

私のせい、ということとは。

「もしかして、契約の影響によるものなのか？」

「……うん」

こくん、と頷くエリイ。

「悪魔との契約後、その人は発作が起こるの。少なくとも一回は、ね」

こんなに早く起きるとは思わなかったけど……と彼女は付け足す。「知ってるとは思っけど、人は悪魔と契約したその瞬間から魔力を

纏うわけじゃない。あることをきっかけにして纏い始める。……その？あること？っていうのが、一度目の発作」

そこで僕は昨日の出来事を思い出した。悪魔であるエリイとすでに契約を交わしていたのに、海斗に近づき、触れてしまったことを「うつかりしてたな……」

「何が？」

「いや、昨日のことなだけださ。僕、契約した後に海斗に触っただろ？ 海斗はあの時特に何も言わなかったけど、内心は嫌がっていたのかもしれないな、って」

うーん、とエリイは腕を組む。

「契約者が身に纏う魔力はその契約者本人にしか害を及ぼさないってこと、彼も知ってるでしょ？」

「ああ、学校でも習った」

「どっちにしろ魔力はまだ纏ってなかったんだし、私は大丈夫だと思っけどね。それに君たち、親友なんでしょ？ それくらいで嫌がったりしないよ、きっと」

「……だと、いいんだけど」

そんな曖昧な言葉を返してしまった自分が嫌だった。わからないんだ。僕は海斗のことを信じているけど、彼が僕のことを本当はどう思っているのかわからない。だから不安になって、そんな返事をしてしまったのだ。

なんとなく話を变えたくて、僕はさっきのエリイの言葉で疑問に思ったことを口にする。

「少なくとも一回ってことは、また起きるかもしれないってことだよな？」

「そう。だけど過去には多くても三回まで、一回しか起きないこともよくある……じゃなくて、私が一番言いたいのは……」

エリイはうつむく。長い金髪が彼女の顔を隠し、表情が見えない。彼女が今何を考えているのか、なんとなくわかった。まだ会って間もないけど、彼女は優しい悪魔だ。優しい悪魔、なんて言葉はお

かしいとも思うけど、僕は彼女を信じてる。                   もしかしたら、信じただけなのかもしれないけど。

だから僕はそつと手を伸ばす。彼女の頭へと。

「あんな発作、何回でも乗り越えてやるよ」

ポンポンと頭をなでると、彼女は顔を上げた。その瞳は僕をまっすぐに見つめてくる。

「……助けるから」

「え？」

「絶対に助けるから。もしまた発作が起きても、龍希のこと絶対に助ける。何回でも」

その言葉に、僕は微笑む。

「ありがと。頼んだぞ、エリイ」

「うん」

エリイはそこでやつと明るい笑顔を見せてくれた。笑顔の方が彼女には似合うけど、なんだか恥ずかしいのそうとは言えない。

契約者にとって悪魔はパートナーのようなものだ。悪魔にとっての契約者も同じ。

言葉にしなくても分かり合える、そんな関係を彼女と築いていきたいと思った。

「あれ？」

玄関の木製扉を開けた僕の背後で、エリイは家の外を見て首を傾げた。彼女は僕の横をするりと通り抜け、外に出る。

朝食をとりながらの話の中で、エリイの服装についての話題が出た。彼女は今身に付けているものしか服を持ってきていないということだが、これからの格好はどうするのか？ という内容だ。結局、僕の母親の若い頃のものがあったためとりあえずはそれを貸すという結論に至った。

黒いタートルネックのＴシャツの上に着ているのは、白色の薄いニット生地。そこから十センチほど覗く赤いミニスカートは、膝上十五センチ程度だろう。黒いタイツとヒールの無い歩きやすそうなブーツも身に付けているエリイは、何も知らない人からすれば人間にしか見えない。肩に掛けられている布製の袋には替えの服や金銭や日用雑貨などが入っている。

そして僕が着ているのは、灰色の長袖パーカとジャージ素材の黒い長ズボン。どちらもサイズが大きいためぶかぶかである。袖などが長い方が温かそうだと思ったのと、どうせすぐ背が伸びるだろうという考えで約二週間前に買ったもの。靴は白いスニーカーという何ともラフな格好だ。ある一点を覗いては。

僕の左腰にあるのは、鞘に収まった一つの剣。わりと細身の短剣で、刃渡りは四十センチ弱といったところ。そこそこ軽いから扱いやすいし、いつも使っている剣ということでこれを選んだ。鍔の中央にはめ込まれている小さな赤い石が綺麗な剣で、十字架を模したような型も気に入っている。まあ、父親のものを合わせても家には剣は三つしかないのだが。

僕が背負っている布でできた袋の中にも、エリイ同様、服など自分の荷物が収まっている。

エリイは家の外に出てから僅か数歩で歩みを止め、地面を見下ろした。不思議に思った僕は、

「どうかしたのか？」

と尋ねつつ、彼女のもとへと向かう。

エリイの横で彼女と同じように地面を見下ろし、僕は目を見開いた。

？ 頑張れ！？

木の枝などで書いたのだろうか、地面には大きくそう記されていた。

見覚えのある筆跡。男のくせに丸めの字を書くところは昔から変わらないな、と思う。

「……ありがとう」

小さく呟く。

すごく嬉しかった。背中を押してくれたその一言が。明るく送ってくれた、その一言が。

「何か言った？」

「いや……何でもない」

エリイの問いかけに僕は苦笑し、高校の校舎がある方角へと体を向ける。他の建造物や木々によって視界は遮られてはいたが、それでも僕は微笑んだ。流れ出しそうになる涙を、必死に堪えながら。

頑張るよ、海斗。

優しい友人に、心の中でそう言葉を返して。

信じるということとは少し違うのかもしれない。でも、これ十分だ。

楽しかった。海斗と一緒にいることが。嬉しかった。海斗が傍にいてくれたことが。

一緒にいて心から笑うことができるのなら、それは相手を？信じている？ということになるのではないかと思ったから。

心から笑い合うことができて、心から励まし合うことができて。それは？信じ合う？ということに似ていると思ったから。

だから僕は信じる。海斗のことを。海斗が僕のことを信じてくれているということ。

エリイへと視線を移し、もう一度微笑む。

「行こうか」

彼女は僕と同じように笑顔を浮かべ、「うん」と頷いた。

これからこの旅がどうなるのか、僕にはわからない。けれど不安はなかった。それはきつと、傍にいてくれる新しい仲間ができたから。優しい友人を信じるができるようになったから。

大きく深呼吸をして、晴れ渡る空を仰ぐ。雲一つ見当たらない、



本当によく晴れた日だ。

ゆつくりと顔を下ろし、僕はエリイ　新しい仲間と共に、新しい道を歩き始める。

「契約者が身に纏う魔力っていうのは、その人が契約した悪魔の体内にある魔力と同じなの」

自宅を後にしてからまず話題になったのは、魔力について。これから旅を続けていくにあたり、知っておかなければならないことだ。「契約者の発作と同時に起きるのが、悪魔とその契約者の魔力の共鳴。発作の時、体に何か異変を感じなかった？」

「異変……」

歩きながら胸に左手を当て、発作が起きた時のことを思い出してみる。一番辛かった呼吸困難、それから頭痛……と蘇る記憶。そこで僕はふと、あのときの不思議な感覚を思い出した。

「なんていうか、こう……体の中で何かが疼くような感じはしたけど」

「そう、それが魔力の共鳴っていうの。私も同じような感覚がしたから、今朝はそれで目が覚めたってわけ。あと、二回目以降の発作では契約者の魔力が暴走する可能性もあるから気を付けてね。……暴走すると、ちょっと厄介だから」

「え、マジで？」

「うん、マジで。……まあ、もし暴走しそうになったら私が止めてあげるよ」

エリイはそう言い、綺麗に並んだ白い歯を見せて無邪気に笑う。それにしても、魔力に関してここまで詳しいことは知らなかった。「詳細は契約した悪魔に聞け」というような暗黙のルールが存在していたようで、事前には大まかなことしか教えてもらっていなかったのだ。突然いろんな話を聞いて、正直頭がパンクしそうだった。

「そういえばさ、龍希は今まで生活費とか……どうしてたの？」

遠慮がちにエリイが問う。？今まで？というのは、僕の両親が死んでからということだろうか。

それなら、と僕は口を開く。

「村長たちが資金の補助をしてくれてたんだ」

「へえ、優しい人たちだね。現世ってどの地域もそんな感じなの？」

「それはどうだろう？ 僕の両親の死因は特殊なものだったから」

そう言うってから後悔した。まずい流れになったな、と。できれば両親の死因については話したくない。特に、エリイには。

「あつ」

だから僕は少し大袈裟に声をあげる。

「どうしたの？」

僅かに目を丸くして首を傾げたエリイに、「ほら、あれ」と僕はある場所を指差す。

僕の指した先には、二十人ほどの人の群れ。僕たちが今いる場所から五十メートルくらい離れた位置にある村の出入り口のすぐそば、つまり僕たちがこれから通る道にその人々はいた。

「何してるんだ？」

不思議に思いつつ歩みを続けると、人だかりの中の一人 近所に住む小学生だった が僕たちの方を見た。その子供が他の人たちに何かを言ったかと思うと、そこにいたすべての人が一斉にこちらを向く。僕たちの姿を見つけるなり、その中の数人が笑顔で手を振ってきた。

「見送りに来てくれたんじゃない？」

微笑むエリイ。

見送りだなんて、と僕は驚いた。嘘だろ、と。でも、そうとしか考えられないのは事実で。

動揺しつつも歩き続けると、彼らまでの距離が約二メートルというところで、

「よう、龍希！」

そう声をかけられた。

「頑張れよ！」

「気を付けてね、龍希くん」

「お兄ちゃん、元気でね！」

口々に言う人たち。その人だかりの中の誰もが、こちらに笑顔を向けてくれていた。

「龍希くん」

静かな、けれど優しい声で僕の名前を呼んだのは、海斗の父親。

彼は静まった群衆の輪から一步外に出て、僕の目を見つめる。

「君はこの旅の中で、一度は必ず傷つくことになるだろう。……体ではなく、心が」

「はい。覚悟しています」

「……そうか」

海斗の父親が言ったことがどういう意味なのかは、その場にいた全員がわかっていたはずだ。

心が傷つく。その理由は、僕らがグレティアの民だから。三百年前から、疎まれていた存在だから。

昔、誰かが言っていた。「俺たちグレティアの民は皆が嫌がる？ 悪魔との契約？ をしてやっているというのに、何故疎まれなければならないのだ」と。その通りだと思う。でも、グレティアの民が疎まれたり迫害を受けたりすることに納得してしまう自分もいた。僕がもし一般人として生まれていたのなら、同じようにグレティアの民を疎んでいたかもしれないなどと思ってしまっていた。

「負けないでくれ、龍希くん。無事に帰ってきてくれ。……私たちは、ここから祈っているよ」

「……はい。ありがとうございます」

一礼し、微笑む。海斗の父親もまた、笑顔を返してくれた。

「それと……」

海斗の父親はその表情のまま、今度はエリィに視線を向ける。エリィはびくつと小さく肩を震わせ、怯えるように僕の服の裾を掴む。

「海斗から話は聞いたよ。君が龍希くんと契約した悪魔だろう？  
君も頑張ってくれ」

その言葉にエリイは目を丸くする。予想外の言葉だったらしい。  
正直、僕も少し驚いたくらいだ。

「あ、えつと……頑張ります」

笑顔を向けてくる海斗の父親に、エリイは警戒を解いて笑む。

「それにしても、こんなに可愛いらしい悪魔と契約できるなんて龍  
希くんも幸せ者だな」

そんな台詞を口にした彼に、やっぱり海斗の父親だな、と僕は心  
の中で苦笑する。

「それじゃあ、また。……行ってきます」

もう一度礼をし、僕は顔を上げてエリイと共に歩き出す。

背後から聞こえてくる見送りの声に、十歩ほど歩いたところで歩  
きながら振り返って大きく手を振る。海斗の父親たちも、こちらに  
向かって手を振ってくれた。

グレティアの民は人々から疎まれている。

そして、それ以上に 悪魔たちが疎まれている。

だから僕は決意した。何があっても、エリイを守ろうと。

村を後にした僕たちが初めに向かうのは？ゆうりん幽琳村？。ここから北  
へ向かった場所にある村で、面積も人口も冬華村より上だ。零魔の  
森へ向かう途中にあるため、なんの心配もなく立ち寄れる。旅費と  
して国から支援金が出るため、金銭的な問題もない。ちょっとだけ  
観光もしたいと気楽に考えていたくらいだ。

長い金髪を揺らしながら僕の右隣を歩くエリイ。契約したばかり  
の昨日と比べ、彼女との距離は少しは縮まったのだろうか。

お互い秘密にしていることがまだあるはず。その秘密を打ち明け  
られるような距離に早くなりたいと思った。そしてその時が来たら、  
僕は彼女にきちんと打ち明ける。

八年前、僕の両親を殺したのは悪魔なのだと。

「ねえ、それ本当なの？」

薄暗い一室でベッドに腰を下ろしてそう声をあげたのは、栗色の髪と金色の瞳を持つ少年。華奢な体躯と少し長めのショートヘアに加え、中性的な顔立ちと声ということで女の子に見えないこともない。中学生くらいの外見だ。

彼の視線の先には、閉ざされた窓ガラスに右手を添えて夜空を見上げる一人の少女の姿があった。ミディアムボブの髪は藍色。年齢は高校生と同じくらいだろう。

そんな彼女はくすつと笑い、背後に座る少年の方へと体を向ける。「間違いないわ。あれは絶対に？あの子？の魔力だった。今年はあの子が召喚されたのね」

楽しそうに話す少女に、少年は笑顔で言葉を返す。

「よかったじゃん。久しぶりの再会なんですよ？」

「ええ、もう何年も会っていなかったもの。現世で会えるだなんて思ってもみなかったけれど、嬉しいわ」

言い終えてから、彼女は再び窓の外の夜空に視線を移す。そして、紫色の瞳を細めて妖艶に笑んだ。

「彼女たちには、きちんとおもてなしをしてあげないと」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5382x/>

---

aLia ~ 悪魔との契約者 ~

2011年12月5日22時49分発行